

最後の一歩 【完結】

イーベル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クリスマスの告白から十年近くの歳月が流れた。社会人になっていた橋 純一は、あ
る日あの馴染みの商店街で一等を引きを当て、『二泊三日の温泉旅行』にペアで行く権利
を手に入れた。

物語はその旅行に恋人、七咲逢ななさきあいを誘う所から始まる。

この旅の目的は、彼女との距離をさらに縮めること。最後の一歩を踏み出すことだ。
全3話。

目

次

リョコウ
メイレイ
コンヤク

49 25 1

リヨコウ

会社を出て、手が外気にさらされないようにポケットに突っ込みながら、僕はいつもおでんの屋台を目指していた。

それは彼女との約束があつたから。さらに言えば彼女に取り付けたい約束があつたからだ。携帯電話を使えばいいじゃないかと思うかもしれない。

けれど、こういう大事な事というか、大きなイベントに関しては直接会つて伝えたいと思っている。

電話は苦手という訳でも無いけれど、それだと彼女の驚く顔も、喜ぶ顔も見れない。単純に楽しみが減つてしまふ気がする。そんな適当で、曖昧な理由だった。

一度、彼女にその理由を伝えたときは呆れられただけで、最後に「なんだか先輩らしいです。嫌いじやないですよ」なんて、締めくくられたつけ。あの時の照れてる顔はカメラで撮つて、永久保存したい可愛さだつたなあ……。

そんな事を考えていると、おでん屋の暖簾が見えてきた。隙間から中の明かりが漏れ出している。強い風が僕の頬を撫でる。思わず体を震わせて、体温が下がるのを誤魔化した。

「早い所中に入つて、温かいものを頼もう」

そう小さく呟いてから、僕は小走りをしてポケットから手を抜くと、暖簾をくぐつた。

「あ、先輩。お疲れ様です。待つてましたよ」

小さな後ろ姿が振り返り、僕に向かつて手を振つた。ショートボブの黒髪。猫の様にパツチリと可愛らしい目つき。それにすらりとバランスの取れた体躯。間違いなく僕が待ち合わせしていた女性。僕の彼女、七咲逢だつた。

「逢？ 早いじやないか。僕はてつきりもう少し遅くなるかと……」

「ふふつ、今回は根回ししておきましたから」

微笑みの裏には何かが隠れているような気がしたけれど、深くは追及することは止めた。何が出てくるのか分からない。

「まあ先輩。取りあえず座つて、何か注文したらどうですか？」

「それもそうだね。じゃあすいません。注文、大丈夫ですか？」

屋台の店主さんに話しかけ、注文して席に着いた。彼女の隣。肩が触れそうで触れない距離。もう何年と居座り続けている距離だつた。

ここに居るだけで、すり減らしていく精神的エネルギーが満ちていつている。そんな気がする。我ながら単純だとは思うけれど、理屈ではないのだ。

少し待つと皿に盛られたおでん、コップに注がれた焼酎のお湯割りが目の前に出され

た。

「じゃあ、乾杯です。先輩」

「ああ、乾杯」

コップとコップをぶつけると、一口含んだ。高校生の時はこんな風にお酒を飲んでいた自分を想像でなかつたけれど、なんてことはない。ただ、年を取つただけ。中身は高校生とほぼ変わっていない。強いて言うならほんの少し、知恵がついただけだ。逢に言つたら「そんな事無いですよ」って言われるとは思う。だけれど、これは僕の思い込み。他ならぬ僕自身が、成長できたと思えていない。それが拭えない限りは永遠にそうなのだろう。

だから、僕自身が胸を張つて、成長できたと思えるようにならなければならない。そのためには……

「……ぱい、先輩つ。聞いてますか？」

「ああ、悪い、逢。何だつけ」

「まつたく、話があるつて呼び出したのは先輩じやないですか」

「逢が僕を肘で小突く。

「ああ、そうだつた」

「しつかりして下さいよ。もう……」

「ゴメン、ゴメン。話したい事つて言うのは、これの事でさ」

僕は上着の内ポケットからある物を取り出して、逢の前に差し出した。赤と白で彩られた封筒だつた。

「これは……何の封筒なんですか？」

「まあ、いいから開けてみてよ」

「はい」

逢は僕に言われるがまま、封筒を開封すると、中から更に紙切れを取り出した。

『二泊三日・温泉旅行ペアチケット』……これ、どうしたんですか、先輩?』

「実はさ、この間当てたんだよ。福引で」

「福引、ですか?』

「逢も知ってるだろ。あの商店街の福引だよ』

「ああ、あの。ふふ……」

逢は口元に手を添えて、笑いを抑える。

「なんで笑うんだよ、逢』

「いえ、ちょっと……思い出してしまつて』

「思い出したつて、何を?』

「忘れちゃつたんですか? あれですよ、あれ。一等、ハワイです……』

逢は僕にそう伝えるところえきれなかつたのか、再び笑い出してしまう。

それを見て、僕も思い出す。一度美也に福引を忘れないようについて落書きされた事があつた。その時最初に僕を見たのが逢で、これ以上ないつてくらいに笑われたのだつた。

「勿論、覚えてるよ。美也にされた落書きだよね」

「あの時の先輩の顔はもう……傑作でしたよ……」

「笑いを堪えてまで思い出さなくていいよ」

逢はすいませんと肩を震わせながら、笑い過ぎて滲んだ涙を拭つた。

「あの時は外れちゃいましたけど、今回はきつちりと大物を引き当てたんですね」

「うん。今回の一等だつてさ。それで、逢さえ良ければなんだけど、二人で一緒に行かな
いか?」

「はい。勿論ですよ。いつですか?」

思つたよりも素早い返事だつた。躊躇いが見られない。付き合つているとは言つても、二人つきりでの宿泊なのに。もう少し恥じらいだと、距離感というものがあると思つていた。だから僕は思わず聞き返す。

「……逢、そんなにすぐに決めていいの?」

「先輩はすぐに決めたら困るんですか?」

「いや、そういう訳じや……」

逢から視線を逸らして、皿にあつた大根へ手を付けた。

別に困るとか、そういう訳じや無い。逢はもう少し奥手で、猫の様にゆっくりと距離を詰めるべき、これまでの経験からそう考えていたのだ。だから、普段と少し違う、彼女のアグレッシブな姿勢に虚をつかれた。それ故に少し戸惑つてしまつただけだ。

「ふふ、すいません。ちよつと、意地悪しちゃいましたね」

「まあ、別にいいけどさ」

「それで先輩。いつになるんですか。この旅行は」

「場所と、日程の予約もあるから早く決めた方が良いのは確かかな。都合の良い日はどこにあるかな?」

「そう、ですね——」

逢はバックの中から手帳を取り出して、パラパラとページをめくつていく。僕はそれを眺めながら、少し遠い未来へ思いを馳せる。彼女との二人きりの旅行がどのような物になるのか、今から楽しみで仕方がなかつた。

▽

車内で小さく流れる音楽。それに合わせて鼻歌が聞こえる。運転席から見る声の主は頬杖を付いて、窓の外をぼんやりと眺めていた。

「ご機嫌だね。逢」

「え？ そう見えますか？」

僕の方を見て、パチパチと瞬きをした。僕は前方を見つつ「うん」と肯定する。すると彼女は照れくさそうに頬をかきながら、目線を散らした。

「たぶん、そうですね。だつて先輩とのデートも久しぶりですし、それこそ旅行なんて……つて先輩つ、なんで笑ってるんですか！」

「いや、だつて——」

「だつて、じゃないです！ 逆に聞きますけど、先輩は嬉しくないんですか？」

「嬉しいよ。嬉しいから笑つてる。僕が顔に出やすいのは逢がよく知つてるだろ」

意識してキメ顔を作つてみる。一瞬、彼女は戸惑いを見せたが、二度首を振るとすぐに表情をいつも通りに戻した。

「騙されませんよ。先輩がそうやつて時々、見せる為に表情を変えるの、知つているんですから。気が付いてないとでも思つてましたか？」

「え、ばれてたのか……」

「ええ、バレバレです。でも、まあ……そういう姿勢は嫌いじゃない、ですよ」

「そつか」

ハンドルを握り直して、途切れそうだつた集中力を奮い立たせた。僕の『アタック』が

見透かされていたのは勿論だけど、その後のセリフは予想外だ。手痛いカウンターを貰つた気分だつた。この攻撃に僕は勿論、仕掛けた逢本人まで照れて、黙つてしまふ。

お互にだんまりを決めたまま、車を走らせていると今回の目的地が見えてくる。カタログでは緑に囲まれていたが、今の季節は冬。覆い隠す葉は落ちて、和風の建物の全景がよく見て取れる。それを機に僕は沈黙を破つた。

「逢、あそこ、旅館じやないか？」

「えつ、ああ。みたいですね」

「カタログで見た通りつて訳ではないけれど、落ち着いたいい雰囲気だね。これなら期待通りゆっくり羽を伸ばせそうだよ」

「確かに楽しみですけど、先輩、最後まで氣を抜かないでくださいね。氣が緩んだ時こそ事故は起こりやすいんですから」

「そんなこと言わないでくれよ。何か、不安になっちゃうじゃないか……」

不安を漏らしつつも僕は最後まで安全運転を続けた。車を駐車して外に出る。無事たどり着けたことに安堵しつつ、ホツと息を吐く。白い蒸気が天へと上がつた。

「やっぱり寒いですね」

「そうだね。ずっと車内にいたのもあつてより一層、つて感じだ。早く中に入ろうか」「ええ、そうしましようか」

トランクに積んでいた荷物を降ろしてから鍵をかける。チカツとランプが光るのを確認してから二人分の荷物を抱えた。

「あ！ 先輩。大丈夫ですよ。自分の荷物ぐらい、自分で持ちます」

「いいつて、普段は逢に頼りっぱなしだからさ。こういう時ぐらい、僕を頼つてよ」

「とは言つてもですね……」

逢は不満げに声を漏らすと、顎に手を当てて横目でこちらを見た。

別に、旅行だから特別気を遣つているわけでは無い。それに実際の所、普段は要所要所で頼つている。

だから、こういつた形で還元しないとフェアではない。そう思つてはいる。だけれど女は納得していないようだつた。

「僕は僕で、また今度逢に頼るからさ。それじゃあ、駄目かな？」

「先輩つて、変な所で強情というか、意地つ張りというか……。まあ、いいです。分かりました。少しだけ、頼りにさせて頂きますね」

「少しだけ、か」

そう付けられてしまうあたり、自分の甲斐性の無さがより浮き彫りにされた気分だ。

だけど、まあ自分の要求を通せたのは悪くない。

それから二人分の荷物を持つて旅館に向かい、自動ドアをくぐつて、足を踏み入れた。

木材が多く使われた開放的なロビー。照明は会社で見るような、蛍光灯の白色とは異なつて、暖色で落ち着いたもので、なんだか柔らかい雰囲気を醸し出していた。
非日常感漂う空間に視界を泳がせて、カウンターを探す。しかし広すぎてどこに何があるのかさっぱりだ。見当もつかない。

困った僕は逢に助け舟を求めることにした。

「逢、カウンターがどこだかわかるかな？」

僕が問いかけると逢はキヨロキヨロと辺りを見渡した後、ビシッと手を伸ばして何かを指差した。

「でしたら、あれじゃないですか？ 前に人が立つてます」

「ん？ ああ、本当だ。流石逢」

「はあ……こんな事で感心されても嬉しくありません。ほら、行きますよ」

先行した逢に続いて、受付に向かう。立っていた女性に逢が声をかけた。

「すいません、予約していた橘なんですが」

「はい。お待ちしてました。二名でご予約の橘様ですね。この紙に必要事項の記入をお

願いします」

「はい。分かりました」

逢は受付の女性からペンを受け取ると、その場で書き始めた。荷物を持ったまま彼女を眺める。

書類に書き込みながら、ときたま垂れた髪を一度耳にかける。耳が見えたり隠れたり、なんだかチラリズムを刺激される。

彼女と一緒に仕事をしている人は毎日このような仕草を見ているのかと思うと、何だか羨ましかつた。

「すいません。記入が終わつたので確認をお願いします」

「はい、ありがとうございます。……はい大丈夫です。ではご案内させていただきますね。こちら——」

それから僕たちは一通り説明を受けた。夕食の時間だとか、温泉などの施設の利用方法。最後に部屋の鍵を受け取つて、その場を後にした。

荷物を部屋の隅に置いて一息付く。僕たちに割り当てられた部屋は和室だつた。畳にテーブル。お茶菓子とケトル。テレビと冷蔵庫。オーソドックスな面々が出迎えてくれる。でも、この部屋にはありふれた物だけじゃない。

「先輩、この部屋つて確か、露天風呂が付いているんですよね」

「うん。そうだね。夜は星空を見ながらお風呂を楽しめるらしいよ」

逢の問いかけに頷く。そう、この部屋には露天風呂が付いている。大浴場の運営時間

なんて気にせず、いつだつて温泉に入つて疲れを癒すことができるのだ。

その気になれば混浴だつて……。いやいやいや。逢がそんな簡単に乗つてくれるわけないじやないか。現実を見ろ、僕。

そもそも、彼女と二人きりで温泉旅行なんて既に非現実的なのだから、これ以上を望んだらバチが当たるだろう。

気持ちを切り替える為に僕は首を左右に振つた。

「ところで逢、せつかくお茶菓子もある事だし、お茶でも淹れようか？」

「はい。そうしましようか。あ、先輩は座つてていいですよ。私がやるので」

「え、ああ。ありがとうございます」

逢はそう言うと手際よく急須にティーパックを入れて、ケトルからお湯を注いだ。それを眺めながら僕は手元にあつた煎餅の袋を開けて齧つた。バリツと軽く音が室内に響く。

「あ、先輩。私にも一枚頂けますか？」

「ん？ ああ、ほら」

「ありがとうございます」

逢は僕から煎餅を受け取ると、封を破つて僕と同じように一口。ゆつくりと咀嚼してから再び口を開いた。

「しかし先輩。この後、どうしましようか」

「どうつて、何？」

「いえ、夕飯にはまだ時間がありますし、かといって温泉に行くにはまだ早い気がします」

その言葉を受けて僕は時計を確認する。時刻はまだ三時過ぎぐらい。逢の言う通り時間には余裕がある。知らされた夕食の時間は、たしか七時。四時間もの空白だ。

そのうちの一時間ぐらいは温泉に当てることができるけれど……。

「そうだね。温泉にはまだ早いか。逢はいつごろに温泉に行きたい？」

「えつと、できれば食前が良いんですけど。いいですか？」

「うん。僕は逢に合わせるよ。となると、あと三時間ぐらいは暇があるんだね」

「そうなりますね。でも、たまにはこうやつて先輩とゆつくりお話をすることも悪くないです。最近は夜遅くまで仕事だったのです」

「そつか、じゃあお疲れ様だね」

逢は座椅子の背もたれに体を預けるとグイーッと両手を広げて伸びをした。閉じた口から洩れる声と、前面に突き出される胸部が何とも色っぽい。

あまり見続けると逢に呆れられてしまうので、観察もほどほどに留めて会話に意識を戻す事にする。何を話そうか少し考えて、煎餅を持っていたので『食べもの』の話題か

ら入ることにした。

「この煎餅美味しいけど、どこのなんだろう？」

「そうですね。こういうのは御土産コーナーにあるのが定番じゃないですか？」
「じゃあ、後で見てみようか。出るときには御土産をねだられた事だし」

「美也ちゃんにですか。そういうば最近会えていないですね……」

「まあ、逢も美也も社会人になつて忙しいだろうし、仕方ないよ」

話題に出て来たところで、僕は美也について思考を巡らせる。美也は高校を卒業後、短大を経て社会人になった。

兄としてはちゃんと仕事が出来ているかどうか不安はあるが……。でも、いつまでも美也も子供じやない。ちゃんとやつているはずだ。そう信じたかつた。

逢は頃合いと見たのか急須を取つて、二人分の急須にお茶を注いでいく。僕は一言お礼を言つて受け取ると話題を『世間話』へと切り替えた。

「そういえば、逢の弟はどうなんだ？」 確か、もう高校生じやなかつたけ？」

「郁夫ですか？ 今丁度、高校三年生ですよ」

「へえ、あんなに小さかつたのに」

そうか、僕たちが高校を卒業してから十年が経っているんだ。だからもうそれぐらいになつても、おかしくはない。

「昔に比べれば、随分と手がかからなくなりましたし、今じゃ積極的にお手伝いをしてくれるんですよ」

「へえ、あれだけのわんぱく小僧からは、想像がつかないな」

「まあ、私の矯正の甲斐、という事にしておいてください」

「そつか、流石逢だね」

僕が褒めると逢は照れくさそうに笑つて「ありがとうございます」と返した。両手を合わせて首をかしげるその仕草は、なんとなく高校時代を思い起こさせる。改めて見ると時間も経つて、大人びた雰囲気になつた。

でも相変わらず、いや、より可愛らしくなつたと言つてもいい。それはこの長い付き合いの中で距離を縮めたから、本当の表情を見せるようになつてくれたのだと、僕は勝手に解釈していた。

いい感じに空気が柔らかくなつてきた気がする。逢もすっかりリラックスしているようだし、このタイミングなら何か「行動」を起こしても上手くいきそうだ。そう思つた僕は早速、逢に声をかける。

「なあ、逢」

「どうかしましたか先輩？　あ、お茶のおかわりですか？」

「いや、そうじやなくてさ。ここ最近は忙しかつたつて言つてたじやないか」

「ええ、まあ。最近はデスクワークが長くて……」

逢は右肩に手を当てて腕を動かして見せる。どうやら肩が凝っているらしい。それはある意味好都合だ。僕は席を立つて、彼女の肩に両手を置いた。

「え、先輩？ 何を……」

「いや、せつかくだしマッサージでもしようかなって」

「ああ、結構ですよ。せつかく休みに来たんですから、先輩はゆっくりしていいですよ」

逢は手を振つてやんわりと否定する。

「だからこそじゃないか。僕は逢の疲れがきつちり取れるように手助けをしたいんだ。
……駄目かな？」

耳元で囁く。逢はそれに驚いたようで身を震わせた。そしてしばらくの沈黙の後で、
口を開いた。

「そこまで言うのなら、分かりました。じゃあ、先輩……お願ひします」

「うん。じゃあ早速だけさ、逢。うつ伏せで横になつてよ」

「横に、ですか？」

想像していたこととギヤップがあつたのか、きょとんと目を丸くして僕を見た。僕はそんな事を気にせずに更に押す。

「うん。だつてそうじやないと体全体をマッサージできないじゃないか」「わ、私は別に肩だけでも構いませんよ。先輩だつて大変でしよう」

「往生際が悪いぞ、逢。そこまで気に病むようだつたら、後で逢が僕にやつてくれればいいから。さあ、観念して横になるんだ！」

「分かりましたから……」

そう言うと逢は座布団を枕代わりにしてうつ伏せになつた。その状態の彼女を僕は上から眺める。

こうしてみると、なんというか、こう……官能的な刺激を受けるな。今日最初に会つたときは、セーターにジーンズという露出度が低く、もともことしていてラインがあり出でていのい服だけれど、じつくりと見ていると分かる。

その中には彼女のしなやかな肢体が隠れていることが！　逢の身体については僕がここ数年で一番見ていると言つても過言ではない。実物を見ればその上からゆつくりと、全体像が浮き出てくるようだ。今からこの体を揉む、いや、マッサージをすると思うと……。そんな事を考えて睡を飲み込んだ。

「えつと、先輩。やるならやるで、早くしてくれませんか」

首を回して、チラリと立つてゐる僕を見て指摘した。そうだ。ここで引く訳にはいかない。自分で『行動』したとはいへ、ここまで上手くいったんだから。

僕は……逢の身体を、揉む！

そう決心すると僕は拳を握り、逢の真横に正座で座った。

「じゃあ、いくよ。逢」

声をかけて彼女の腰に触れた。セーターワンピースと彼女の体温を同時に指先から感じ取る。そして、手の平まで密着させて、少し力を入れて彼女の身体を揉み解す。僕の身体には無い弾力、柔らかさを感じた。

「んっ……」

「逢、痛かったら言つてよ」

「いえ、大丈夫です。もう少し強くしてもらつてもいいですか」

「え？ そう、分かつたよ」

僕はさらに力を強くして逢の腰を揉んだ。所々骨の感触がうつすらと感じ取れるけれど、やせすぎているつてわけでは無い。最低限の表面の脂肪に内側にしつかりと筋肉が付いている感じだ。きっと逢は高校を卒業してからも、適度に運動をしているのだろう。

「これぐらいの力でいいかな？」

「ええ、丁度良いです。それにしてもこんな特技があつたんですね。気持ちいいですよ」

「そうかな？ よく両親にはやつてたけど、特技って言えるほどじや……」

「私が気持ちいいと思うんですから、素人目に見れば十分特技ですよ」

「そうかな？　じゃあちよつと張り切っちゃおうかな」

それから僕は腰から肩甲骨付近、肩から腕に指先と、揉むポイントをずらしつつ、マツサージを続けた。最後に足を解^{ほぐ}そうとして立ち上がる。そこでふと、逢の顔を見る。

「……寝てる、のか？」

瞳を閉じ、片腕を枕にして心地よさそうに寝息を立てていた。マツサージに夢中になつっていたせいで気が付かなかつたけれど、いつの間にか寝てしまつたらしい。疲れも溜まつていると言つていたし、仕方ないだろう。

このまま寝かせていると風邪を引いてしまうかもしれないし、上着でもかけておいた方が良い。鞄と共に持つて来ていた自分のコートを手に取ろうとして、手が止まつた。それは僕の頭にある思い付きがよぎつたからだ。

……これは、チャンスなんじゃないか？　いや、チャンスに違いない。

逢はこう見えて、シャイ。恥ずかしがり屋だ。大胆になる時もあるけれど、それは例外。基本的にはスキンシップには消極的だ。逃げてしまつ場面だつて見られる。

だから僕は手を繋いだり、その……キスをしたりするときも、どこか遠慮してしまつていた。本人の嫌がる事^事を無理にはさせたくないからだ。

しかし、今回に限りそれを配慮する必要性はない。何故なら本人の意識はないから。

嫌がるという感情が起くる余地はない。

一度深呼吸をして、僕はある場所へと手を伸ばした。起きていたなら彼女は絶対怒ると思つて、マッサージする箇所から外していた場所。

そう、お尻だ。

逢とはそういう事の経験が無い訳ではないし、触った事も何度かある。でも先程話した通り逢は恥ずかしがり屋なのだ。じつくりと触らせてくれたことはない。

でも、彼女の持つている物の素晴らしさは見ただけで分かる。かつて水泳部で鍛え上げた肉体は健在だし。腰からお尻のボディラインはそこらのグラビアにだつて、引けを取らない美しさを持つ。その蠱惑的な場所、未知の感覚を追求したかつた。

指先が触れる。セーターとは違うジーンズの感触。その奥にある温かみ。弾力は、腰よりも大きく僕の指を押し返す。

満を持して、手の平まで接地面積を広げる。ほんの少しだけ力を入れた。指先でマシュマロを弄繰り回しているような感覚だ。それを味わうと同時に、

「ひやっ！」

軽い悲鳴が鼓膜を揺らした。慌てて彼女の上半身に視線を移す。逢は首を回して、僕の方を睨みつけている。

「あ、逢。起きてたんだ……」

『起きてたんだ』じやありませんよ。先輩！ な、何をするんですか！』

逢はかなりのスピードで体を起こして、僕を上から見下ろした。腕を後ろに回して、自分のお尻を撫でている。触られた場所を確認するような仕草だつた。

「何、つてその……」

「ハツキリと言えないようなことですよね。私がうたた寝している時に仕掛けてきたんですから。最低です！」

最後の一言を強めで言い放ち、ゆっくりと僕に詰め寄つて來た。座つていた僕は後ろに後ずさりをしながら説得を試みる。

「いや、そのなんというか、その……出来心だつたんだ！ 逢のお尻があんまりにも柔らかそうだつたから」

「先輩は柔らかそうな物を見つけたら、何でも揉みしだくんですか！」

「いや、それは違う！ 僕が揉みしだくのは逢の身体だけだ！」

「誇らしげに言い返さないで下さい！」

逢は呆れたように「全く……」と漏らして、腰に両手を当て仁王立ちをした。

「でも確かに僕が悪かった。逢が怒るのはもつともだ」

「分かつてゐるなら、実行する前に思いとどまつて下さい」

「そう、だね。これからはなるべく気を付けるよ」

「なるべくじやなくて絶対です！ 分かりましたか、先輩？」
「は、はい」

僕が縮こまりながら返事を返すと、逢はため息をついてから話し始める。
「分かったのなら今回はこれぐらいで許します。せつかくの旅行で不機嫌になるのも、
馬鹿みたいですし」

「逢……」

「ただし！」

ビシッと人差し指を立てて、付け加える。

「先輩には罰を受けて貰います」

「ば、罰つて……」

「私だけが恥かしめを受けるのは不公平です。先輩にもここで一度、痛い目に会つて貰

わないとフェアではありません」

「それは、確かにそうだ。分かった。逢が納得いくように煮るなり焼くなり好きにして
よ」

「変態的な部分はともかくとして、そういう潔い所は嫌いじやありませんよ、先輩。では
早速ですが、さつきの私の様にうつ伏せで横になつて貰えますか？」

「うつ伏せで、横に？」

「ええ」

逢は頷く。僕は言われるがまま、さつきの彼女と同じようにうつ伏せになる。ほんの少し前に逢が寝ていたのもあつて畳が温かい……って、僕は何を考えているんだ。首を振つて、思考を振り払う。

「実は前々から試したい事があつたんですよ」

「試したい事?」

「ええ、最近ある本を買いました。自分で自分にやろうとしたんですけど、上手くいかな
くて。だから先輩には実験台になつてもらいます」

そう言うと逢は僕の腰に跨つた。彼女の体重が僕に預けられる。彼女は小柄で軽量
級だとはいつても心の準備ができていなかつたから、心掛けずうめき声が漏れた。

太ももから彼女の手の感触。その感触はふくらはぎ、足先へと移動する。そして、靴
下の中に指を入れられた。

「あ、逢!?

何を……」

「これからやる事の準備ですよ。裸足になつてもらいます」

スルスルと僕の靴下を剥いで、むき出しにする両手で包まれる。彼女の温もりが伝
わつて心地良かつたけれど、それと同時に寒気も感じた。

「えつと、さ。逢。一応聞くけどさ、どんな本なんだ? その本つて。まさかプロレス技

事典とかじやないよね」

「そんなんじやないですよ。考えが物騒ぶつそうですね、先輩」

「そ、そ、うか。良かつたあ」

ホツと息を付く。罰ゲームとは言つても武力行使ではないらしい。

「内容はかなり奥深かつたので省略しますが、タイトルだけ伝えると……『プロが教える足裏マッサージ！～痛みで疲れを吹き飛ばせ～』ですっ」

「え？」

「覚悟は良いですか先輩？」

「え、ちょっと逢？ 待つあああ——!!」

メイレイ

逢からの罰を甘んじて受けた後、時間が丁度良い事もあつて各自で大浴場に向かつた。僕は一時間ほど大浴場を堪能してから、浴場からコーヒー牛乳を片手にロビーに出る。

しばらく歩いて、空いていた竹で編まれたベンチに腰をかけた。ここなら逢が出て来た時に僕を見つけやすいだろうと思ったのだ。

瓶の蓋を開けて、苦みよりも甘味が強い液体を口にする。冷えたそれが喉を通り抜けたたびに、火照っていた体がゆっくりと冷まされていく。この感覚が好きで、ついつい買ってしまうのだ。

まあそれは置いておいて、せっかく一人なのだし、今回やるべきことについて整理しておこうと思う。

なにも目的もなく逢を誘ったわけでは無いのだ。この温泉旅行を当てたことは偶然だつたけれど、これから先にやる事は必然にしたい。

まず僕の目的は彼女に改めて思いを伝える事だ。僕がこれからも逢と長い時間を過ごしていきたいという事を伝える事、端的に言えばプロポーズ。結婚の申し込みだ。

僕の気持ちは固まっている。問題は無い。

だけれど、彼女は、逢はどうなのだろう？

僕と一緒になつてもいいと思ってくれるだろうか？

その答えは分からない。……当たり前だ。

でも、だからこそ追い求めてきた。本気で向き合つた。逢にとつて僕がそういう人物になれるようになれる。

だから、後は確かめるだけなのだ。逢の気持ちは、この十年間の答えを。
「すいません先輩。お待たせしましたか？」

下を向いていた僕を覗き込むように逢は問いかける。僕は「いいや」と首を振つた。
逢は「そうですか」と答えて僕の左隣に座る。

「先輩も買つたんですね。コーヒー牛乳」

「ん？ 逢も買つたんだ」

「ええ、ほら」

そう言つて僕の目の前で、茶色の液体が入つた瓶を振つて見せる。纏つていた浴衣の袖がつられて揺れた。

風呂上りの逢は僕と同じく浴衣に身を包んでいる。薄着になり、腰で閉めた帯の効果もあって、来ていた服よりも格段に体の凹凸がはつきりしていた。湯上りで赤くなつた

頬も相まって、色っぽさが増している。

今思えばどうして僕は先にマッサージをしたのだろう。浴衣になつてからなら、より逢の体温も、肌の感触も感じ取れただろうに……。今になつてみると後悔しかない。

「先輩、どうしたんですか？　さつきから難しい顔したりして」

「え、そう？」

「はい。私があそこから出てきた後と、たつた今。少なくとも二回はそんな顔をしてました。何か考え方でもしていたんですか？」

そう言われて僕は言葉に詰まつた。どちらも考え方をしていたのには変わりない。ただ、一方は真剣な考え方だつたのに対し、もう片方は卑猥な考え方だつた。どちらにしろ、話すことが難しそうだ。

結局、僕はどちらを話すわけでもなく、思うがままに口を動かして誤魔化すことにした。

「いや、逢がどんなふうに出てくるのかを考えてたんだよ。髪を結んでくるかもとか、浴衣はどんなふうに着てくるかなあ……つてさ」

「そうですか。お期待に沿えず、すいませんね。髪はそのままですし、浴衣も先輩が想像していたようにエツチに着崩してはいませんから」

「そ、そんなこと言つてないじゃないか」

「あれ、違いましたか？ 先輩の事ですから、てっきりそんな事を考えているんじやないかと思つたんですが」

「……そんな事はないよ」

エツチな事について考えていたのはあながち間違いではない。だからあまり強く否定できなかつた。

「今の間は何ですか、先輩？」

「いや、特に深い意味がある訳じや無いよ」

「そうですか……。それで、どうですか私の浴衣姿は」

逢は僕の目の前でくるりと一回転して見せた。浴衣の裾が、髪が、ふわふわと揺らめいて、何だか周囲にいい匂いを振り撒いていそうだ。

「うーん」

「どうして悩むんですか」

「いや、どうやつて表現したものかと思つて」

そう、困つた事に彼女の可愛さを、愛おしさを上手く表現できるだけのポキヤブラリーを持ち合わせていなかつたのだ。こういう時に自分の語彙力の無さが恨めしい。

「別にいいですよ。一言でも二言でも。こういうのは行つて貰う事に価値があるんですから」

「まあ、そうだね。言わないよりは、ずっといい」

期待する逢を視界に捉えつつ、僕はから揚げにかけるレモンのように限界まで振り絞つて続けた。

「かわいいよ、逢。魔法の鏡があつたなら確認したいぐらいだよ」

「ふふっ、ありがとうございます。白雪姫に例えられるというのは光榮ですね。でも、少し困りました」

顎に手を当てつつ、逢は僕を横目で見る。

「え、どうして？」

「だつて、先輩。鏡に問い合わせるのは王妃様ですよ。最後にひどい目にあわされちゃいます」

「あれ、そだつたけ？」

小さい頃に美也に読んで上げたつきりだつたから、すっかり忘れてしまっていたみたいだ。逢はそんな僕を見てクスクスと笑う。

「はい。肝心な所でちょっとドジ踏むのは先輩らしいですけど」「ははは……」

「でも、先輩には王子様になつて貰わないと困ります」「え？」

耳元で囁かれた。僕は思わず聞き返したけれど、逢は微笑むだけでもう一度は口にはしなかつた。彼女は立ち上がりつて僕の正面に立つ。

「さて、先輩。部屋に戻りましようか。お風呂も入り終わつた事ですし」「ちよつと待つてよ。逢、さつきのは——」

「そう何度も言いませんよ。言葉の意味は先輩が考えて下さい」「そんな……」

うなだれる僕に逢は「行きますよ」とだけ声をかけて歩き始めた。

立ち上がって彼女の後を追うけれど、僕にはどうしてもさつきの言葉の意味を知りたくてたまらなかつた。

だつて、本来見えないものを可視化できるチャンス。逢がどう思つているのか、本来見えないはずの答えを掴むことができる機会だつたのだ。だからどうしても諦められなかつた。

僕は聞き出すための手段を求めて、思考を巡らせた結果目の端に捉えたある物を利用することに決める。

「なあ、逢」

「なんでしょう？　さつきの話の続きをならしませんよ」

「そうじやなくてさ、あれ見てよ」

僕は離れた所にあつた物を指差した。そこには白線が引いてあり、ネットが張られている台。まばらではあるが、人がボールを打ち合っているのが見える。

「卓球台ですか」

「うん。旅館に温泉、それに続くものと言つたら卓球だよ。せつかくだし、やつて行かな
いか」

「定番ですからね。良いでしよう。汗をかいでも室内の方の温泉に入れば良いですし」
意外にも逢は素直に僕の誘いに乗つた。僕はラケットを二つとボールを借りると、逢
の対面に陣取つてから声をかける。目的は勿論、逢を罵にはめてさつきの話の続きをさ
せることだ。

ラケットを片手にプラスティックでできたボールを弾ませる。

「逢、せつかくだし勝負しないか?」

「勝負ですか? まあ、良いですよ。ルールはどうします?」

「じゃあ、六本先に撮つた方が勝ちで、勝者は敗者になんでも一つ、言う事を聞かせられ
る命令権を得るつて事でどうだ?」

「それでいいですよ」

俺の戻、言う事を聞かせられる権利に対して間を開ける事無く頷いた。身体能力とい
う名目、男女の差、それらを踏まえてもう少し考える時間があつてもいいはずだ。僕に

有利なのがまるわかりなのだから。

「良いの？」

「はい。だつて先輩に負ける気なんてしませんから」「後になつて後悔しても絶対に聞かないから、なつ！」

語尾を強めに言い切るとラケットを力強く振った。そこのスピーダでボールが弾み、敵陣地に向かっていく。

完全に不意を突いた。逢は完全に棒立ちだ。これで一本目は僕の物。そう、思つていた。

でも、次の瞬間。プラスティックの軽い反発音。ボールが軌道を変えた。逢がラケットで打ち返したのだ。僕の逆サイドにボールが吸い込まれ、地面に落ちる。見事なりターンエースだつた。

「全く、こんな事じやないかと思つてました。卑怯な手を使いますね、先輩は」

「真剣勝負なんだ。卑怯も何もないだろう」

「ええ、そこに文句を言う気はありません。ただ、後で『ハンデをくれ』なんて言つても聞く気はありませんから、そのつもりで」

逢はそう言つて笑うと、ラケットを振るつた。



「私の勝ちです」

「そして、僕の負けか……」

ストレート負けは回避できたものの、逢に完敗を喫した僕は、地面に両手を付いて敗北の苦笑を味わっていた。

よくよく考えて見れば、逢はバリバリの運動部出身（それもエース級だ）であるのに對して、僕は帰宅部。さらに社会人になつてまともにスポーツすらしていない。そこをしつかりと考慮すればこの敗北は必然だつただろう。美也を相手取るのとは訳が違う。

敗因分析はさておき、問題は逢がどのような命令をしてくるのかという事だ。正直な所僕は負けることを想定していなかつた。故に、どんな命令に対してもケアができるいない。強いてその対抗策を上げるのであれば、

「さて、逢。いい感じに動いたことだし、そろそろ部屋に戻ろうか」

こうして誤魔化すことだ。

それを見た逢はいつものように手を合わせて微笑む。

「それもそうですけど先輩、いつまでそんな恰好をしているつもりですか？」
「ん？ ああ、ゴメン。負けたのが想像以上に悔しかつたからさ」

逢の指摘を受けて僕は立ち上がりて地面に付いていた部分を叩く。

「でも仕方無いです。だって、それだけ命令権が欲しかったんですね。先輩は」

逢は隣に移動して語りかけてくる。くつ……忘れていてくれなかつたか。いや勿論逢がそんな単純な人間だとは思つていなかつた。けれど、僕に残された最後の希望が夢く碎けて散つたのだから、悔しがらずにはいられない。

「負けは負けだ。逢は何を命令するの？ 煮るなり焼くなり好きにしてよ」

「ふふっ、じやあ、どうしましようか？ 先輩にしてもらいたい事が多すぎて悩んじやいます」

逢は僕を見ながらニヤニヤと口元を緩ませていて。きっと彼女は悔しさに歪む僕の表情を見て、楽しんでいるに違いない。

やがて逢は「よしつ」と小さく呟くと話を切り出した。

「この話は一旦保留にします」

「えつ、そんな」

「ルールには違反してませんよ。『いつ』なんて時間の指定はありませんから」

「それは、そうだけど……心配で僕の身がもたないよ」

「今日中には消化しますから、それまで我慢してください」

「それなら、何とか」

僕は胸を撫で下ろす。いつでもどこでも命令権に怯えるのはごめんだ。それが回避

されたのは不幸中の幸いだつた。

「じゃあ、戻りましょうか。先輩」

僕はその言葉にうなずいて、ロビーを後にした。



部屋に戻つてしまらく待つと、待ちに待つた夕食の時間がやつて來た。旅館の仲居さんがそれらを机の上に並べて、僕たちは礼を言つてそれからお互の対面に座る。

「すごいですね、先輩。何というか浮世離れしているというか……」

「浮世つて、これは現実だよ、逢。でもまあ、言おうとしていることは分かるけどさ」
たぶん、逢が言いたいのは普段よりも豪勢な食事だということなのだろう。家庭料理もいいけれど、こういった物が食べられるのはやはり、特別なときだけだ。

「以心伝心で何よりです。冷める前に食べちゃいましょうか」

「そうだね。じゃあ、頂きます」

「はい。頂きます」

手を合わせてそう言うと、割り箸を割つて料理に手を付けた。刺身の盛り合わせから

一切れ取つて、醤油だまりに付けて口に入れる。

「旨い！」

「御刺身ですか？」

「ああ、柔らかくて、口の中でゅつくり解けていく感じって言えばいいのかな。

梅原のお

寿司屋さんにも引けを取らないよ」

「梅原先輩ですか。何か、懐かしいですね。お寿司屋さんになつたんですか」

少し驚いたように目をバチクリと瞬きをした。

「あれ？ 言つて無かつたつけ」

「はい。上級生の進路なんて、なかなか知る機会なんてないですよ。私が知つてたのは
塚原先輩とか、水泳部の先輩たち、それと先輩ぐらいです」

「そつか、梅原は実家のお寿司屋さんを継いだんだよ。今度、逢も一緒に行こうか」

「それは楽しみですね。先輩、御馳走になります」

「僕が奢ることになつてる!?」

「冗談ですよ」

逢は口元に手を添えて、クスクスと笑う。僕はてつきり命令権を行使されたかと思つてびっくりしてしまつた。逢は本当に僕をからかうのが上手い。

「それよりも先輩、ごはんよそいますよ。お茶碗貸してください」

「ああ、ありがとうございます？」

「どれぐらいにしますか？」

「ちょっと多めでお願いするよ」

「はい。分かりました」

逢は僕から茶碗を受け取ると、おひつからよそつて僕に手渡した。僕は「ありがとうございます」と言つてから受け取る。

それにしても、こうやつて同じ食卓を囲んで、ごはんまでよそつて貰うとなると何だか新婚の夫婦みたいだ。もし、そうだったらどれだけ幸せなのだろう。

家に帰ると逢が居て、こうやつて食事を共にして……考えただけでもなんだかドキドキしてきちゃうな。

でも、これを夢物語にしないためにもいつかは言わなきやならない。

そう、いつかは……。

「先輩、どうかしましたか？　ちょっと怖い顔をしてます」

「え、そうかな？」

「はい、眉間にしわが寄つてました」

逢の指摘でふと思考の沼から抜け出す。相変わらず僕はポーカーフェイスが苦手らしい。でもここで馬鹿正直にいう訳にはいかないので、パツと思いついた適当な話を切り出した。

「どうしてこんなに美味しいものを作れるのかなって」

「それは、料理人の企業秘密じやないですか？」

「まあ、そうなんだけどさ。もし知つてたら家の料理もちょっと美味しいできるかも
しないじやないか」

僕は適当に話を進める。逢は箸を運ぶ手を止めて、少し黙った後に僕に言葉を返す。
「先輩の言う事にも一理あります。でも、知つたところで実践できないつてこともあります」

「実践できない？ どうして」

「一般的なのは道具ですかね。例えば中華料理なら、厨房の火力や鍋ですとか、なかなか用意できないです」

成程。僕は頷く。確かに用意がしづらいだろう。できたとしても大きなコストがかかりそうだ。逢は続ける。

「あとは……作り方を知つても、それを習得するまで継続できないって事もありますかね」

「継続できない、三日坊主になるつてこと？ まあ技術を習得するのは大変だけどさ、それは僕みたいな面倒くさがりだけで、逢なら何とかできたりしないの？」

「技術だけなら何とかなるかもしません。でも、食事は別です。中華料理つながりでチャーハンにしますけど、先輩は毎日チャーハン食べたいですか？」

「いや、あまり」

「ですよね。それと外食のチャーハンつて結構油使つてるんですよね。家庭料理なら使うのを躊躇つちやうぐらいに」

確かに。僕は領きながら箸で焼き魚の身を解し始める。

「例外はあれど、作つたなら食べなきゃいけません。高頻度で沢山の油分を食べなればなりません。となると健康を犠牲にすることになります。だから、維持できない。実戦できない。してはいけない、つてところでしょうか」

納得だ。確かに健康を考えるのであれば、維持してはいけない。こういう所でも逢の家庭的な感覚を感じ取れる。

本当に良いお嫁さんになりそうだ。まあ……恥ずかしくて口にしないけれど。

「だから、別に知らなくてもいいんですよ。自分の継続できる調理の仕方を知つていれば」

「……そんなものか」

「ええ、そんなものです」

逢はそう話題を締めくくると、再び箸を動かし始めた。僕は解した魚の身を口へと運ぶ。噛み締める度に広がる旨味を味わいつつ、考える。

知らなくてもいい。

この単語が妙に耳についた理由。それはきっと、僕がさつきまで逢の心境を暴こうと

していたからなのだろう。

知らない事を知ろうとする。これは当たり前なのだけれど、知らないでいても良いという発想もある。知らないからこそ、見えてくるものがある。

僕は逢に拒絶される恐怖に怯えて、それから目を背けていた。だいたい、知ったところで何だ。ダメだと分かつたら身を引くのか？

それは、違う。

分かつた所で、僕の気持ちは変わらない。自己満足でも何でも、この気持ちを伝えなければ気が済まないのだから。だからこの件に関しては、知らなくてもいい。そう思つた。

「やつぱり、逢はすごいな」

「先輩、何か言いましたか？」

「いや、何でもないよ」



「ふうつ……あー気持ちいい」

「先輩、戻つて来るなりだらしないですよ」

「僕は悪くない。布団が気持ちいいのが悪いんだ」

食事を終えた僕たちは、もう一度浴場に行つて汗を流して戻つて来た。卓球をして汗

をかいてしまつていたのもあつて、そのまま寝るのは憚られたのはばかだ。

その障害が取り扱われた以上、敷かれた布団に寝つ転がる事に躊躇する理由なんてない。

「そういう所、先輩は子供っぽいというか、成長していないというか……」

「弟にそつくり、とか？」

「いえ、最近の郁夫は先輩より幾分も大人です」

「そんな……」

高校時代からよく似ているだの、何だのと言われ続けてきたからショックだ。逢の弟はいつの間にそんな成長していたのだろうか。少し気になる所だ。

「でも僕だって昔に比べれば幾分かマシになつてるよ。こういう所を見せるのは逢の前ぐらいだよ」

「それは……喜んでいいんですか。呆れればいいんですか」

「まあ、逢も寝つ転がれば分かるつて。ほら」

僕は上体を布団から起こすと椅子に座つていた逢の手を引っ張つて、体制を崩させた。彼女の身体が布団に倒れ込む。野球で言う所のヘッドスライディングみたいだつた。

「急に何をするんですかっ！」

「いや、逢にもこの気持ち良さを体感して欲しかったからさ。気持ちいいでしょ？」

「それはそうですけど……なんか気に食わないです」

うつ伏せになつていた逢は腑に落ちないようで、プクーと頬を膨らませた。逢にしては珍しい仕草で、僕はそれをじっくりと眺める。

「何ですか」

「いや、拗ねた逢も可愛いなつて」

「別に拗ねてません」

いや、それ言つて拗ねてない奴なんているのかな。少なくとも僕は見たことが無い。特に美也なんかはその典型例で、そう言いつつも態度は不機嫌なのを隠さないのだ。

まあこの状況は九割方僕が悪い。軽度とは言つても不機嫌なままでいられるのは嫌だ。だから僕はある行動に出ることにした。

四つん這いで逢に近寄ると、彼女の頭に触れた。手が前髪をかき分けると、普段は見えないおでこが見える。風呂上りだからなのか普段からなのか分からないけれど、サラサラとした感覺が手から伝わった。

「本当は僕だつて、カツコイイ所とか大人っぽい所の一つや二つ、見せたいと思つてゐるんだけどさ。慣れてないというか、得意じやないんだよ。申し訳ないけどね」「……知つてますよ、それぐらい。ここまで長い付き合いなんですから」

逢は僕の手を振り払うこと無く、受け入れるとそう言葉を返した。その後に今度は僕の頭に向かって手を伸ばす。小さい手が前髪をかき分けて僕のおでこを晒した。

「でも、見せるのが得意じやないだけで、カツコイイ所も大人っぽい所もいっぱいあるつて事も知つてます」

「そつか。ありがとう」

僕はちよつと力を入れて逢の頭をワシャワシャッと撫でた。逢の手が頭から離れて、僕の手を捕まえるために動く。

「ちよつ、やめてくださいよ、先輩。髪崩れちゃいますから」

「ああ、ゴメン。逢が可愛かつたから、つい」

「悪いと思つていいのなら手を止めたらどうですか！」

一向に手を止めない僕に対して、逢は交戦する決意を固めたのか、鋭い目つきでこちらを睨む。威圧感としては『一人ぐらい殺つてやる』ぐらいの殺気を感じ取つた僕は一瞬、撫てる手を止めてしまつた。

その隙に逢は僕へと詰め寄つて、押し倒す。そのまま流れるように僕の腰の上に居座り、マウントを取つた。両手首を掴んで、手を動かす事すら許さない徹底ぶりだ。

「先輩は忘れてませんか？」

「何を、かな？」

「私が命令権を持つてゐる事です。これだけ私に好き勝手しておいて、何の報復も無いと思つたら大間違いですよ」

「そういわれて思い返すのはつい先ほどの『足裏マッサージ』なのだが、あの痛みをまた味わうのは流石に気が引けた。

「いや、その……逢、僕が悪かった。だから罰で使うのは勘弁してもらえないかな?」
「先輩はさつき私が『止めて』と言つても聞きませんでしたよね? 都合が良すぎませんか」

「それは、それだけど

「だいたい、命令権に拒否権なんて無い、ですよね」

彼女はそう言つて首を傾けた。目を細めつつ笑つてゐる。悪戯を仕掛けるときの少年みたいな表情。僕はそれに屈して、目線を下げた。

でも、思わぬ副産物が視線の先ににあつたのだ。浴衣の帯が、緩んでゐる。さつきのもみ合いになつたとき引っかけたのだろうか? 顔にばつかり目が行つていてさつきまでは気が付きもしなかつた。ということはもしや……。

予感を確信に変えるために、腰の帯から視線を上へ戻す。首元。チラリと見える鎖骨。そして、普段は隠されている二つの果実は——見えそうで、見えない。
くそっ! どうしてだ! あと少し、逢があと少しだけ動いてくれれば見えるのに

……！

「先輩、どこ見てるんですか」

「えっと、ど、どこだと思う？」

「私の胸を舐めるように見てましたね。気が付かないとでも思いましたか？」
「ばつちり正解。女性というものはどうしてここまで視線に敏感なのだろう。僕は見
られても気が付かなそうなものだ。

しかし認めるのも嫌だつたので、目線を完全に逢から外して黙秘権行使する。

「だんまりですか。先輩のくせに生意氣です。やつぱり『お仕置き』をしなければいけま
せんね」

そう言うと逢は拘束していた両手を開放、代わりに僕に密着するよう体制を変え
た。足と足。お腹とお腹。胸と胸。それぞれがぴったりとくつついた。

逢は軽量級で、乗られてもそこまで苦しくない。それでも、問題はある。浴衣越しに
伝わる彼女の体温、女性特有の柔らかな身体。それらが僕の心臓のテンポをガンガンに
上げてしまう。そしてこの状況なら、逢は当然この鼓動を察知しているはずだ。

そして顔に手を添えられると暴飲に向きを変えられて、目と目が合う。

「先輩、顔が真っ赤です。恥ずかしいんですけど？」

「そんな事はない……よ」

「こんなにも心臓がドキドキしてゐるのに？　まあ、いいです。これからもつと、恥ずかしくなつて貰うんですから」

お互いの唇が触れる。重ねるだけのキス。しつとりとした感触を味わつたかと思うと、そこに別の何かが触れた。唇よりも温度が高く湿つたそれは僕の唇を割つて、僕の口内に侵入する。

歯の近くをなぞつて、やがて僕の舌に触れた。一瞬戸惑つてしまつたけれど、やがては僕も触れ返して、彼女を受け入れる。

お互いの普段は触ることは無い部分に触れ合つて行くうちに、自分と彼女の境界線がぼやけて行くような感覚に陥る。

近すぎる視界はぼやけていて、自分よりも高いと思つた体温はどつちがどつちなのが、そもそも差なんてあるのか、分からなくなつた。

でも、それが妙に心地よくて、ずっと続けていたい気分にはなつたのだけれど、酸素を欲した身体がそれを許さない。

名残惜しくはあつたが、僕は自由になつていた腕を動かして、彼女の背中を指先でそつとタップした。一つになつていた唇が分かれて、お互に乱れた呼吸で酸素を補充する。

逢は身体を僕に預けたまま、耳元で囁いた。

「どう、でした……。ドキドキ、しましたか?」

「したけど、さ。ちょっと……別の苦しさが混ざってる」

「ふふつ、かもしませんね。先輩、肺活量が低かつたみたいですから」

笑った彼女の息が耳にかかる。くすぐったいのを耐えて僕は話を続けた。

「そりやあ、水泳部だつた逢からすればそうかも知れないけれど、一般的だよ」

「だとしたら一般的じやあ、物足りないです。私はもつと先輩と……したかつたんですから」

「そつか」

背中に回していた腕で彼女をより強く抱きしめる。存在がより強く、より確かに感じられるようになつた。

「ねえ、逢。これで命令はおしまい?」

「違いますよ。これはお仕置きです。先輩が私の胸を盗み見てた罰です」

「じゃあ、まだ命令権は残つてるんだ」

「そう、なりますね」

逢がそう答えると、しばらくの間沈黙が続く。その間感じられたのは、呼吸で上下する腹部が互いを押しあう感覚、心臓の鼓動ぐらいだつた。

「ねえ、先輩」

「何?」

「命令の、件なんですか?...」

「……うん」

「もう一度、しませんか?」

コンヤク

前日、僕はなかなか寝付けなかつた。なかなかに過激だつた逢の「命令」によつて高ぶつた気持ちを抑えるのに時間がかかつたのだ。

それは逢も同じだつたようで、僕たちはそろつて寝不足氣味。キレの悪い思考回路のまま朝食を頂いて、部屋に戻つた。

布団はもう無くなつていたけれど、僕は畳の上に寝転がる。

逢は座椅子に座つて、ぼんやりとこちらを眺めていた。瞼は落ちかけていて、船を漕ぎそうな頭を頬杖で支えている。そんな彼女に僕は声をかけた。

「ねえ、逢」

「……どうしましたか先輩」

「ちょっと眠い？」

返事が少し遅かつた逢に僕はそう質問する。彼女は瞼を擦りつつ、ゆっくりと首を縦に振る。

「ええ、まあ。昨日はなかなか、寝付けなくて」

「そつか。じゃあ、僕と一緒にだ」

「……奇遇、ですね」

「そうだね」

「ポワポワとした応答をしている逢に比べれば、僕の意識はハツキリしている。どうやら彼女自身が僕よりも昨日の行為引きずつて、寝付けなかつたようだ。そんな昨晩の逢の姿を思うと、彼女がより可愛らしく、愛おしい。」

「ねえ、先輩。今日はちよつと、散歩に行きませんか」

「散歩？ 眠いならここで二度寝というのもなかなか良いと思うけど」

「ちよつと歩いたら、この眠気も晴れると思いまして。せつかくの旅行に二度寝は味気ないでしよう？」

「それもそうだね。じゃあ、そうしようか」

「僕は提案に乗つて、体を起こした。

「僕は一旦外に出てるから、その間に逢は着替えちゃつてよ」

「先輩は着替えないんですか？」

「いや、着替えるけど、逢の後でいい」

首を振つて、彼女の提案を断る。逢は帯を緩めながら立ち上がつた。

はらりと襟が崩れて、彼女の胸元、そして下着がチラリと一瞬だけ見える。昨日はあれだけ待ち望んでいたのに、いざ見るとなると恥じらいが勝つて、まともに見ることが

できなかつた。水色だつたことぐらいしか認識できていない。

逢は視線を逸らした僕に一步近づいた。

「……私は、先輩にでしたら、見られても構いませんよ」

「まだ寝ぼけてるの？」

「そんなこと無いです。本心ですよ」

「そうか、寝ぼけていたのは僕の方だな。ゴメンよ逢。着替え終わつたらまた言つてよ」
本当は聞こえていたけれどそう言つて誤魔化した。僕は浴衣姿のまま背中を向けて、扉の方へ向かう。後ろで逢が何か言つていたような気がしたけれど、聞かない事にした。今はまともに顔すら見れる気がしなかつたから。



無事に準備を終えた僕たちは、コートを纏つて外に出た。ハツと息を吐くと澄んだ空気の上に水蒸気の靄がかかる。水蒸気が昇る先にある空は、一面灰色。公園の砂場の中身を全部ぶちまけたみたいな色合いだった。

「どこに行こうか。逢は何か当てはあるの？」

「いえ、全くもつてサッパリ、当てなんて持ち合わせていません。ノープランですよ」

「え？ 目的があつたから歩きに行こうって言つたんじやないの？」

「逆ですよ、先輩。私は歩いて眠気を覚ますことが目的で、どこかに行きたい訳じや無い

んですよ」

隣に立っていた逢はさつきよりもハキハキと僕の言葉に答えた。

それはそれで良い傾向なのだけれど、少し困る。目的の見えない行動は苦しいものがあるからだ。だから僕の方でその目的を考えて、一つ思いついたことを提案することにした。

「ねえ、逢。昼食は自分たちで調達する予定だったでしょ？　だから、美味しそうな店を探すのを目的に行動するのはどうかな？」

「そうですね。異論はありません。では行きましょう」

「うん、行こうか」

僕は先に歩き始めた逢の後を追つた。そして前後に揺れる手の平を僕の右手で攫うと、車道側に立つた。

手を繋ぐことには慣れている。なにせ恋人になつてから十年も経つてはいるのだから、これぐらいは大したことではない。温かみ、感触から彼女が確かにここに居るのだと、気軽に確かめられる行為だった。

最初は驚いていたのか、やられっぱなしだった彼女も僕の手を握り返す。

「先輩の手、温かいですね」

「まあ、さつきまで中にいたから。それより逢の手は冷たいね。だから中で待つてて良

「いつて言つたのに」

「先輩と早く外に出たかつたんですよ。それに温かい室内だと待つてゐる間に私が寝ちゃいそうです」

「そつか」

それは、それで見たかつた氣がする。ロビーでついうつかりと眠りこけてしまう彼女の姿は見なくたつて、可愛らしいと断言できる。

それに今朝は慌てて、寝顔をゆっくりと見る暇もなかつたから、そのうちじっくりと拝見したいものだ。

「ところで、先輩。最近は運動してますか？」

隣の逢が『運動』について話を切り出して來た。それに対して僕は「いいや」と首を振る。

「やつぱりですか」

「どうしてそう思うのさ」

「昨日先輩と卓球したときに想像以上に動きが鈍つっていたのですから」

まあ確かに、あそこまで一方的にやられてしまつてはそう思われてしまつても仕方がないとは思う。でもそれよりも気になるの事があつた。

「逆に逢はどうしてあそこまで動けるんだ？ 僕と一緒に忙しいはずだろう」

「私は、先輩と違つて怠惰じやありませんので」

逢は得意げにそう言つた。

「僕にはそういうけどさ。逢は何か運動をしてるのか?」

「ええ、勿論。なるべく移動に階段を使つたり、たまに温水プールに行つたりしてますよ」

「へえ、温水プールね」

「季節関係なく泳ぎに行けるので重宝しますよ。そのうち先輩も一緒にどうですか?」

「良いとは思うけど、逢について行けるかどうか心配だな」

「ついてこなくたつていいですよ。自分が継続できるぐらいの運動量が理想的ですか
ら」

「継続は力なりつてこと?」

「まあ、そういうことです」

逢は微笑んで頷く。それにつられて僕の頬も綻んだ。

それからも僕と逢は話をする。会社での事、最近はまつている事、そして最終的には当初の目的である『食べ物』の話に突入した。

「ねえ先輩。そろそろいい時間だと思いますけど。昼はどうしましようか?」

「あれ? もうそんな時間か。どうしようか。逢は何か希望はある?」

「私は……そうですね。私はラーメンが良いかなって。先輩と歩いていたら、高校の帰り道を思い出しまして」

僕と逢は帰り道に定期的にラーメン屋に行つていた。ただ、就職してからは帰り道を共にすることも無かつたし、一緒に行く夕飯は居酒屋やおでん屋さんだ。だから、久々にラーメン屋に行くのもいいかもしない。

「そうだね。じゃあ、ラーメンにしようか」

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ、ラーメン屋を探さないとな」

僕は目線を上げて、周りをキヨロキヨロと見回した。どこかに目印が出ているのではないかと思つたからだ。でもそれを遮るように、逢が繋いでいた手を引いた。

「それならあそこに暖簾が出てますよ」

「え？ 随分と早く見つけたな」

「実を言うと先に見つけたから、ラーメン屋の事を思い出したんですよ」

「ああ、成程。そういう事だつたのか。じゃあ早く中に入ろう。ずっと外に居続けるのはしんどいしね」

逢は僕の言葉に「はい」と頷いて二人で暖簾をくぐつた。

店主の挨拶の後、僕たちは席に案内された。店内にはそことこの人数が押し寄せてい

て活気にあふれている。テーブルに置いてあつたメニューを一つ手に取つて、隣に並んでいる逢と一緒にそれを眺めた。

「逢は何にするんだ？」

「私は、醤油ラーメンですね」

「即決だね」

「ええ、ラーメンの中で醤油が一番研ぎ澄まされてますから。そういう先輩は何にするんですか？」

「僕は、まだ考え中かな」

「相変わらず優柔不斷ですね」

「そんなことない……とは言い切れないな」

メニューに目を向けつつ、そう答える。逢が「ですよね」と頷いた。待たせる訳にはいかないのでなるべく早く決めることにする。

「じゃあ、僕はこの味噌チャーシュー麺にするよ。すいませーん」

僕は手を挙げて店員さんを呼ぶと逢の分を含めて注文をする。店員さんはそれをメモに取つて、奥の厨房へと引き上げていった。大きな声でメニューを読み上げているのが聞こえる。

「じゃあ私、水取ってきますね。ここセルフサービスみたいですし」

「ありがとう、じゃあ頼むよ」

逢は席を立つて、コップを二つ手に取ると、ピッチャーから水を注いでいた。それを眺めていると、彼女は何やら気になる物を見つけたようだ。視線がある一点で固定されている。その先に会ったのはブックラック。何か気になる本があつたのだろうか。

彼女は水を注ぎ終わつたコップを持つ前に一冊の雑誌を脇に挟むと、二つのコップを手に持つて戻つて来た。コップを二つテーブルに並べる。

「悪いね、逢」

「いえ、これぐらいは。それよりも先輩。これ、見て下さいよ」

脇に挟まれていた雑誌を取り出して、僕に見せつけてくる。

「観光ガイド?」

「ええ、この近くの事を書いてあるみたいですね。昼食の後はどこに行くのか決めてましんでしたし、丁度いいでしよう?」

「そうだね。じゃあこれを参考に決めようか」

逢は早速ページをめくつて、今いる場所付近の情報を発掘していく。

「商店街、は今居るこの通りか」

「そうですね、近くの山は秋だと紅葉が綺麗みたいですが、今は季節が悪いです」となると、どこが良いかな……」

どこか良い場所を求めて地図に目を走らせる。トピックされている商店街、山、そして小さく書かれていたある場所が目に入った。

「逢、海岸なんかどうだ？」

「海岸？ どこに書いてあるんですか？」

「ここだよ、ここ。小さくしか書いてないけど」

僕は地図に指を突き立てた。

「へえ、海岸ですか」

「ここから近いし、海なら季節関係なくいい眺めが見れるはずだ」

「そうですね。じゃあ、そうしましようか」

逢は領くとパタンと冊子を閉じた。タイミングを見計らつたように「お待たせしました」とお盆を持つた店員が声をかけてくる。

僕の前には味噌チャーシュー麺、逢の前には醤油ラーメンがそれぞれ置かれた。最後に伝票を置いて店員は立ち去つた。

立ち昇る湯気が僕の鼻腔をくすぐり、食欲を刺激する。一刻も早く麺を啜りたくなつてきた。

「冷めないうちに早く食べようか」

「はい、じゃあ頂きます」

「頂きます」

手を合わせてそう言うと、割ばしを割る。僕の割り箸の割れ方はなんだか歪だつた。



「当たりだつたね」

「ええ、特に麺とスープが良かつたんですけど、トッピングも粒ぞろいで、伊達に観光地で店を構えているわけでは無かつたですね」

「うん、僕はメンマが気に入つたかな。あれはこれまで食べてきただ中でも群を抜いて美味しかつたよ」

「そうですね」

一通り感想を言い終わると、さつき観光ガイドで見た海辺へと足を向けた。暖房の効いていた室内から外に出たこともあつて、外の空気がより一層肌寒く感じる。

遠くを眺めていると、水平線が見えて來た。一步、また一步と近づく度に、風が運ぶ潮の香りが強くなる。

「海に行くのもなんだか久しぶりです」

「僕もだよ。最後に行つたのはいつだつたかな。大学の時以来かな。たぶん、逢と一緒に海水浴に行つたのが最後だ」

「私もそうですよ。いつかまた行きたいですね」

「僕は、あまり気が進まないかな……。逢は覚えてないかもしないけど、ナンパしに来た奴らを追い払うのは大変だつたし、何より逢の水着をまわりに見られるのはあまり好きじゃない」

「へえ、私が取られちゃうと思ったんですか?」

「そ、そういうじやないけどさ……」

「じゃあ、やきもちですか? 可愛いですね、先輩は」

逢は顎に手を当てながら、クスクスと笑つた。このままだとからかわれ続けそうだつたので、僕は話題を逸らすことにする。目の前に迫つて来た海を指差す。

「それよりも逢、ほら、もうすぐそこだよ」

「あ、本当ですね。早く行きましょうか」

逢は僕の手を引いて、足の回転速度を上げた。僕もそれに送れないようく小走りになる。

住宅街を抜けて、視界が水平線に占拠される。テトラポットの横の防波堤に俺達は立つ。空は相変わらず曇り空。色合いがちよつとだけ黒っぽくなっている気がした。

「でも、やっぱり海は良いですね。波の音を聞いてると落ち着きます」

「そうだね。もし晴れいたら、水面がキラキラと光つてもつと綺麗なんだろうけど」

「はい、それだけはほんの少し、残念です」

そう言うと隣の逢は目を閉じた。きっと音に意識を集中させているのだろう。根拠はないけれどそう思つた。

その間に僕は考える。

今回の旅の目的について。

彼女へのプロポーズについて。

明日はもう昼前にはここを出る。今日もこの後はどこに行くのかわからない。適当に散策するだろう。

だから、もしプロポーズをするのならこのタイミングが最良のはず。あとは僕自身が覚悟を決めるだけなのだ。

深呼吸をする。ラジオ体操の様に大きさなものではなく、静かにだ。逢に悟られるのはどうしても、嫌だつた。

「……逢」

「なんですか、先輩」

「実は、さ。話したい事があるんだ」

「……はい」

心臓が耳元に移動したんじやないかと錯覚するぐらいに、心拍音が大きくなる。口の中が乾燥して上手く動かない。話したい事はいっぱいあつたはずなのに、それが、なか

なか出てこなかつた。

じれつたいと思つたのか、逢は閉じていた瞳を開く。俺へと真つすぐな視線を向ける。

それを見て僕は覚悟を決めた。口にした最初の音から震えていて、カツコイイだなんて言えたものじやなかつたけれど、最後までそのまま言い切るつもりでいた。

「あ、あのさ——」

鼻先に触れた冷たい感覺。それに驚いて思わず僕は言葉を止めてしまつた。感触の正体を確かめるために指で鼻に触ると、滴が指にくつついてくる。

そんな事を確認していたら、即座に雨が強くなつた。雲の上でバケツをひっくり返したような激しさだ。

逢は即座に僕の手を取つて、元来た道を走り始める。

「先輩、走りますよ！」

「えつ、ちよつと、逢」「話は後で聞きます。それよりも風邪を引かないように早く戻りますよ！ 走つて下さい！」

先を行く逢に釣られて僕は走り出した。髪が湿気て、額にへばりつく。なまつていた身体はすぐにへばつて、息が乱れる。

そして足が進む度に思う。あと数秒僕の決意が早かつたら、この雨の中でも楽しく帰れただろうと。どうしてその数秒早くができなかつたんだろう。どうして僕は、こんな肝心な所で……。

そんな自己嫌悪は油汚れの様にこびりついて、なかなか消えなかつた。



結果的に僕たちはグショ濡れになつて旅館に帰つた。部屋に備え付けてあつたバスタオルで水分を拭き取つていく。

「それでもすごい雨でしたね」

「……ああ、そうだね。まさかこんなに激しく降つて来るなんて思わなかつた」

「風邪を引かないようにお風呂に入りましょうか」

「うん、そうした方が良いだろうね」

力なく僕は返事をした。気力はまだ完全に回復していない。今の自分をどうしても肯定する気にはなれなかつた。

「じゃあ、先輩。大浴場に行きましょよ。新しいタオルと着替えの浴衣、ちゃんと持つて下さいね」

「悪い、逢。僕は大浴場には行かない。部屋の露天風呂に入るよ。ちょっと、一人になりたい気分なんだ。ゴメン」

「そうですか……分かりました」

逢はそう返事をして自分の荷物を持って、部屋の外に出た。申し訳ない気で一杯だつたけれど、しばらく時間をおかないと普段通りの自分の様に振る舞える気がしなかつたのだ。

水を吸つて重くなつた服を脱いで、持つて来ていたビニール袋に突つ込む。一つタオルを持つと、部屋の露天風呂へと足を踏み入れた。畳のざらざらとした感触が木のすべすべとした感触に変わる。

シャワーの前に置いてあつた鏡が裸の自分を映す。酷い顔だ。不機嫌丸出しなのがひしひしと伝わつてくる。自分で見てもこれなのだから他人から見たら相当だろう。

こんな顔を逢に長い時間見せなくて良かつたと、心から思つた。彼女が戻つてくる頃には何とかしないといけない。せつかくの旅行なのだ。僕のせいだそれを台無しにしたくない。

取りあえず蛇口を捻つて、シャワーへッドから吐き出されるお湯で自分の顔を隠す。頭から下へ向かつて身体を洗つて、湯船に浸かる。

水面に顔が映つたけれど、波打つているからはつきりとは見えなかつた。鏡と向かい合うよりも憂鬱にならずに済みそうだ。

長く息を吐きだして、意識を自分の心に集中させる。これから自分がどう振る舞うの

かを考える為に。

プロポーズのチャンスを逃した。それをまずは受け止めるべきだ。僕は今回の旅行での目的を果たすことができなかつた。

でも、それは失敗した訳では無い。まだ次のチャンスがある。……はずだ。そう、思いたい。

ならば、こんなところでうじうじとしている暇は無い。次のチャンスを作るために行動するべきだ。

だけれど、今の僕には、

「どうしたらしいのか、分からぬ……」

天井に向けて呟く。怖いのだ。失敗したときが。気分が今以上に沈み込むのが。成功したときの喜びよりも、鮮明にイメージできてしまう。もし昨日の卓球勝負に勝てていれば手に入れられた答え、彼女の気持ち。それが、また知りたくてたまらなくなる。

「逢……」

「はい、何でしよう

「へ？ うわつああ！」

君は僕の事をどう思つてゐるの、そう続けようとした所を遮る声。直後、声の主が視界

の端から急に正面に躍り出る。僕は驚いて身を引いた。バシャンッと体につられて水音が立つ。驚く僕を見て彼女は肩を震わせて笑った。

「ビックリしすぎですよ」

「え、いや、だつて。大浴場に行つたんじゃ……」

「戻つて来たんですよ。とても気になる事があつたので。隣、失礼しますね」

僕の返事を待つことなく、バスタオルに身を包んだ彼女は湯船に身体を沈める。肩と肩が触れ合いそうな距離だつた。

「……気になる事つて？」

「先輩がさつき言つていたことですよ。私に、伝えたい事があるんでしよう？」

逢が首を傾げつつ僕に尋ねる。額に付いていた水滴を手の甲で拭つた。汗のかどうかは分からない。でも、僕が焦つていることは間違いなかつた。遠くにあると思つていたチャンスが、たつた今日の前に転がつて来たのだから。

今度は逃さないよう、慎重に言葉を選ぶ。

「そうだ。僕は、僕には……逢に聞いて貰いたい事があるんだ」

「……はい」

逢が隣で頷く。僕は飾らずに思うまま、ゴールに向けて口を動かそうとした。けれど、緊張からか、頭が真っ白になる。ゴールへの道筋が途切れてしまった。

「……あれ、ごめん。上手く言葉が出てこないや。言いたい事はたくさんあつたはずなのに……」

「大丈夫ですよ。ひとつひとつ、ゆつくり話してくださいよ。私、全部聞きますから。あの時の、先輩みたいに」

「うん、ごめん。ありがとう」

僕は目を閉じてから息を吸うと、逢の言う通りにゆつくりと話し始めた。

「僕と逢が付き合い始めたクリスマスから、もうそろそろ十年が経つんだ」

「そうでしたね。早いものです」

「あれから、何でもない普通の日が楽しくて、楽しくて仕方なかつた。もう、逢の居ない日なんて考えられないんだ」

最後の一言のために一呼吸置いた。たぶん僕の人生の中で、最も緊張感のある台詞になるからだ。大事な所で噛んだりしたくはなかつた。

「僕は、この日常を手放したくない。もつと、確かなものにしたいって、思つてるんだ」「先輩……」

「だから逢、僕と……結婚してくれませんか」

手を彼女に差し出した。彼女を見るのが怖くて、目は閉じてしまつていて。返事を貰うまでの時間でさらに緊張して、差し出した手が震える。

やがて、鼓膜に彼女の声が届く。それは言葉ではなかつた。込み上げる何かを押し殺しているようだつた。僕は瞼を開けて、彼女の様子を確かめる。

「……逢、泣いてるの？」

「泣いて……ませんよ。先輩の気のせいに決まつてますっ」

逢はうつむいたまま語尾を強めに言い放つと、僕の身体へと抱き着いて來た。バスタオル越しに柔らかな感触と高い温度が押し付けられる。

彼女の身体を受け止めて、右手で頭をそつと撫でると、耳元で鼻を啜つている音が聞こえた。

「やつぱり泣いてるじゃないか」

「……先輩が、そう思いたいのであれば、勝手にすればいいです」

「じゃあ、そうするよ。それで、逢。返事は貰えるのかな？」

「もうしました。こうしている事がもう答えみたいな物です。本当に先輩は、鈍感なんですか？」

「……悪かつたよ。でもさ、知つての通り僕は臆病者なんだ。ちゃんと言葉にして伝えられないかな？」

そう言うと逢は耳元で「分かりました」と囁くと、少し離れて僕と向き合つた。目元がほんの少しだけ赤くなつてゐる。やつぱり逢は？をついてたみたいだ。

「一度だけしかいいませんからね」

「……うん。分かつたよ」

さつきの僕さながらに、逢は目を閉じて一度、深呼吸。そしてゆっくりと瞼を開けてこう続けた。

「私は先輩のお嫁さんになります。ちゃんと、たちばな 橘 逢にして下さいね」

僕はその言葉に「勿論」と返した。彼女が再び抱き着く。胸の奥からじんわりと幸福感が溢れてくる。僕はそれにじっくりと浸つた。



逢に告白した翌日。

早めに朝食を摂つた。今日は彼女の提案で、一つ追加で用事ができたからだ。旅館を出る前に家族へのお土産を購入して、二人で車に乗り込んだ。

途中に休憩を挟みつつ車を走らせて、今は輝日東に差し掛かったところだつた。太陽は真上に差し掛かっていて、目的地に着くころには昼時になつてゐるだろう。

隣で電話をしていた逢が携帯を閉じて、顔を外から僕の方へと移したのを横目で見た。

「先輩、両親と連絡取れました。大丈夫だそうです。今日は二人とも家にいると言つていました。だだ……」

「ただ?」

「紹介したい人がいるって言つたら、お父さんが不機嫌になつたそうです」

「そ、そつか……」

「どうやら早速ハードルが上がつてしまつたらしい。何だか胃が痛くなつてきた。」

「緊張してますか?」

「どうしてそう思うんだい」

「一瞬、口元が強張りました。先輩はそういう時、結構緊張してたりします」

「伊達に十年近く僕と過ごして來た訳ではない。逢にはいろいろな所がお見通しだ。彼女に隠し事をすることはやめておいた方が良い。そう確信できた。

「……そつか。でも、いつかは乗り越えなきやいけない。逢と一緒に暮らすためには避けられない道だからね」

「そう言つてくれるのは嬉しいですね。ここで逃げるようなら婚約を破棄していくところです」

「ええ!」

「僕は思わず視線を彼女の方に向けてしまつた。彼女はそんな僕を見て微笑んでいる。」

「冗談ですよ。それより前見て下さいよ、前。事故にあつたら大変です」

「僕は視線を元通りに目の前に戻した。」

「……心臓に悪いこと言わないでよ」

「だいたい、先輩はもつと自信を持った方が良いです。私がそんな事で愛想を尽かすとでも思つて いるんですか？」

「そうじやないけど、もし そ うだつたらつて思つとさ……」

「はあ、全く。それだつたらとつくに見切りをつけて別れてますよ。先輩の言動に何度も困らされたか……」

そんなに困らした覚えはない。そう言つたかつたけれど、逢はいろんなところに気を配つて いたりする。だから僕の知らない所でフォローしてくれたのかも知れない。そ う考えると反論できなかつた。

「あ、先輩。その交差点を右です」

「了解つと」

僕はハンドルを切つて、彼女の指示通りに交差点を曲がつた。

「先輩、見えてきましたよ。あの家です」

逢が指を刺した先には一軒家が見える。

「車はどうしたらいいのかな？」

「来客用にいつも駐車場を一つ開けているはずですから、そこに止めて頂ければ」「分かつた。ありがとう」

僕は逢の刺した家の前にたどり着くと、空いていたスペースに車を止める。車を降りて鍵をかけた。ヘッドライトが点灯するのを見届ける。

「じゃあ、行きましょうか」

「ああ、うん」

僕は頷く。そして家の門へと向かつた。逢はその後を付いてくる。『七咲』の表札。その真下にあるインターフォンを僕はなかなか押せない。彼女はそんな僕に問い合わせる。

「押さないんですか？」

「いや、何か押しにくくて。妙な緊張感があつてさ」

「でも、いくら待つたってなにも変わりはしませんよ」

「まあ、そうなんだけどね」

ノックの仕方みたく、インターフォンにマナーなんて無い。少なくとも僕は知らない。だから、考えたつて仕方がないのだ。

「……先輩、何か変な事を考えてませんか？　ちよつと顔がにやけてます」

「え？　そうかな。確かに考え方をしていたけれど」

「……何についてですか？」

「ちよつと、インターフォンの押し方マナーについて」

「やっぱり下らない事じやないですか」

「三回連打するのかを迷つたんだ」

「一回で十分です！ 先輩は小学生ですか!?」

「冗談だつて」

「そうじやないと困ります！」

「はははつ」

「はははつ、じやないですよ。もう！」

逢が全力で突つ込んでくる。僕の肩が二度ほど強く叩かれた。小さな痛みによつて緊張がゆっくりと解けていく。痛みが引いた後、僕は覚悟を決めて、ゆっくりと息を吐いた。

「……じゃあ、行こうか」

「はい」

僕は一步踏み出して、インターフォンのスイッチを押した。

『最後の一歩』 完